

小学生のとき、私は札幌に住んでいた。藻岩山の麓に近い所だ。まだ住宅も密集しておらず、のどかな雰囲気のある一画であった。

冬には家の前でスキーを履き、そのまま雪に覆われた畠の上を滑って行くと、およそ15分で双子山の斜面に着く。勿論、リフトなど無いから、ストックを突きながら頂上まで登り、滑り降りる。飽きもせず、これを何度も繰り返し、日が暮れてきたら、スキーを漕いで家までたどり着く。冬の間、学校から帰ったあの楽しみだった。

通っていた小学校は「幌西小学校」といった。札幌の西の地区にあるから幌西である。この小学校のクラスメートで私と同じ東京近辺に住む友人達とは、80年も経つた今でも親しく付き合っている。

私がシンガポールに勤務していたときには、4～5名の仲間が、訪ねてきてくれて、一緒に中華料理を食べたのが、想い出される。また退職後は同じ仲間で、連れ合い同伴でハワイにまで行くほど緊密な間柄となっている。

皆、歳をとつて体の自由が利かなくなりつつあるが、それでも年に1～2回は集まって、旨い物を食べかつ呑みながら昔話に花をさかせている。

先日のクラス会のことである。私が最近ラジオで、評論家の寺島実郎氏が、「自分は札幌出身で、小学校は幌西、中学校は啓明の卒業生である」と語っていたのを聞いて、彼が我々の小学校の後輩であることを知った、と皆に報告した。

驚いたことに、クラスメートの一人、K子ちゃんが、「私その人ならよく知っている」というではないか。

10歳ほど歳が離れているのにどうしてと訊いてみると、実は彼が啓明中学にいた時に英語を教えたというのだ。小学校を卒業とともに東京に引っ越した私を別にすると、同級生のほぼ全員がこの中学に進学していた。

彼女は大学卒業ののち、英語の教師となって母校のこの中学で彼を教えたことがあるというのだ。彼はよく出来る生徒で、その頃「じっちゃん」と呼ばれていたそうである。